日本語のゆたかさ

～言葉は生きものである。人の行動、品性、希望…。すべてのものが言葉から始まっている～

東北支部　2009年度「富士通トップフォーラム」

作家
伊集院　静 氏

●世界でも稀有な日本語という言語

さまざまな見方があるかと思いますが、言語学者たちは総じて、「日本語は、世界の言語の中で1、2を争うくらいすばらしい言葉である」といっています。その1、2を争うもう一つの言葉は、フランス語だそうです。すばらしさの基準とは、その言葉が持つ豊かさです。豊かさとは、まず、一つの物事を表すのに、どのくらい多彩な表現力を持っているかということ。そして、その反対に、一つの言葉が、どれだけ幅広い許容量を持っているかということです。豊かな表現力と許容量、この2つを持ち合わせているのが、日本語とフランス語であるということです。

日本語には、漢字、平仮名、片仮名、古語、そして、各地方の方言があります。さらにそこに、階級ごとに異なった言葉が加わります。例えば、京都では、公家言葉や町人言葉、廓言葉があります。大阪ならば、堂島商人と河内商人の言葉が違うなど、非常に変化に富んでいます。修飾語、形容詞に関しては、フランス語のほうが少し上ではないかともいわれますが、谷崎潤一郎を読んでみると、その多様性においては世界一だともいわれます。これだけ多岐にわたる日本語を難なく理解し、複雑な構成の言語を、楽々と話すことができる日本人の能力は大変なものです。

さらに日本語の特徴として、書かれた文字が非常に美しいということがあげられます。漢字学者の白川静さんは、亀甲獣骨文字など古代文字から生まれた文字で、これほど美しい形に変化した言語は、日本語以外にはないだろうとおっしゃいました。表現力に加えて、日本語は、絵画的にも豊かな言葉なのです。

では、日本はなぜ、これほど豊かな言語を持つ国になれたのでしょうか。それは、一つには、日本人には、ものを継承していこうという気持ちが強い民族性があることがあげられます。その特徴は、農業の発展や、住居を作るなど、技術力を高める方面にも活かされています。そして、もう一つは、島国のため、外敵から襲われることなく、継承した文化を長い間保つことができたことです。一方で日本人には、渡来人や海外の文化を、柔軟に受け入れる民族性もあります。これに対して、ヨーロッパなどでは、非常に排他的なところがあります。ユリウス・カエサルが著した「ガリア戦記」などを見ても、非常に暴力的で、排他的な戦いの様子が描かれています。これらを比較しても、「受け入れる」ということに対して、いかに日本人が柔軟であったかということがよくわかります。

●方言の豊かさに触れて

私が、東北の仙台に移り住んでから、今年（2010年）で15年目になります。私は、もともと瀬戸内海に面した山口県の三田尻という町で生まれ育ちました。本州の南西にある温暖な町から、東北という地に来て最初に驚いたことは、雪の多さと、猛烈な冬の寒さです。そして、何より印象的だったことは、東北地方の言葉の美しさでした。特に、お年寄りの方が話す言葉が美しいのです。私が幼少期に影響を受けた関西圏の文化では、たとえ相手と同じ意見を持っていても、「ちゃう、ちゃう、ちゃうで（違う、違う、違いますよ）」と、まず否定し、自分の表現でいい直すことがよくあります。ところが東北では、何をいっても、まず、「んだがあ（そうですか）」といって、受け入れて聞いてくれるのです。「んだがあ」という一つの言葉が持つ意味が、非常に広いのです。日本人の受け入れるという柔軟性が、言葉の許容量をいかに大きく豊かなものにしているかということが、この例からもわかると思います。

昨今、編集者の人たちが、あまり本を読まないということで、私は現在、東京で月に1度、読書会を開いています。そこでは、私が選んだ文学作品を若い人々と読んでいますが、以前、三浦哲郎さんの「忍ぶ川」という作品をとり上げたことがありました。その小説の中で、東北地方では、極寒の夜、布団の中で人が裸で抱き合って体を温め合いながら寝るという風習が紹介されているのですが、東北の冬を体験したことのない人々にとっては、この有名なシーンがまったく信じられないといいます。自分が知らなかったことを知る、そして、想像するという力を与えてくれるのが読書なのです。

●誰もが持っている「読む力」

本を読むと、知識が得られます。しかし、知識は、それだけ得ても役には立ちません。知識を持っているだけでは、ただの知識人にすぎないのです。書かれていることを実践してはじめて役に立つのです。知識を得ることの最大の価値は、自分が得た知識で人々や社会を豊かにすることなのです。

しかし、本を読んで、そこに何が書かれているかを読み解いていくという作業は、実は、非常に特殊な行為でもあります。

「解く」というと、非常に難しい作業のように思われますが、人にはもともとその能力が備わっています。例えば、ソクラテスは、美しさを理解する能力について、人間にはこの世に生まれついたときから、体の中に、「これは美しい」という美を認識できる力と、美しいものが持つ崇高さや徳を認識できる能力があるといっています。

文章を読み解くことも、美しさを理解することと同じです。もちろん、そこには書かれている言語が、ある程度マスターできているという前提はありますが、それまで読書の習慣を持たない人が、いきなり

本を読んだとしても、そこに書かれていることは理解できるのです。

また、読書は、テレビやゲームなど、目の前に提供されたストーリーを追いかけていくこととは根本的に違います。文章を読むということは、「解釈」するということです。この解釈という行為が、人間の精神に非常に良い刺激をもたらすのです。解釈するために、読者は自分で意識していなくても、「この次はどうなるのか」といういくつもの想定を出しながら読み進めているのです。それは、小説家が文章を書いているときに、「さて、この次はどうしよう」と考える息遣いと同じなのです。その体験が、私たちの日常生活の中では、貴重なものなのです。そして、その体験は、「想像」から「創造」へという、人間の精神活動にとって大切な働きにつながっていくのです。

●読書が人間にもたらすもの

慶應義塾長を務め、今の天皇陛下の教育係でもあった小泉信三さんは、著書「読書論」の中で、「すぐ役に立つ本は、すぐ役に立たなくなる本である」と述べています。私は、これは、まさに名言だと思います。彼はまた、塾長時代に、あるメーカーの社長からの、慶應義塾に工業部門を作るための寄附をするので、自分の会社の即戦力になる人材を養成してほしいという申し出に対して、「すぐ役に立つ人間は、すぐ役に立たなくなる人間だ」といって断わったというエピソードも持っています。50年後、100年後に、日本の工業が、世界の中できちんとした位置が保てるための本質的な教育はするけれども、今、間に合うだけの学生を輩出するということは、その学生の人生を壊すことになると。

では、すぐには役に立たない読書は、人間に何をもたらすのでしょうか。私は、それは、想像力と思考力だと思っています。与えられたものや記憶の繰り返しがあたり前の日常で、想像力を働かせ、自分から思考するという行為は、読書以外あまりないものです。そして、人間には生まれついて、それができる能力が備わっているのです。

また、読書を続けていくと、だんだんわかってくることがあります。それは、社会とは、自分の想像や予想していた以上のこと、またはそれ以外のことが起きるものだということです。そして、そのすべての出来事を起こしているのは、ほかでもない人間だということです。その人間の中には、さまざまな人がいます。自分の考えに共感して一緒に考えてくれる人。同時に、そうではない考えを持つ人々。それが社会なのだということを理解することが大切なのです。つまり本を読むことによって、自分の考えと違う人々とも融合して生きていかねばならないことがわかってくるのです。それが社会での実践へとつながっていきます。子どもに本を読ませることが大事なのは、このためなのです。自分だけが良ければいいという考えでは、社会で生きてはいけません。本を読んで涙を流すことがあるように、ある出来事に対して同じ感情を抱く、つまり他人の痛みを理解する能力も、読書から自然に学ぶことができます。このように、他人を思いやれる品性というものも、読書から与えられる貴重なものです。

本には、たとえ良書と呼ばれるものでも、3割から4割はわからないところがあることが普通です。しかし、わからないところはわからないままで良いのです。大切なことは、最後まで読んでみることです。作家にとっても、プロとして生きていける基準は、最後まで書ききれるかどうかということです。最後まで書ききれる作家は伸びていきます。書ききることで何がわかるかというと、実は、作家自身の「間違い」なのです。この形で書き進めていったら間違いだろうと途中でわかるので、それでも書ききるために、さまざまに思い悩み、選択しながら進めていきます。そうしたものが、行間には必ず眠っています。読者が最後まで読みきらなければならない理由は、作家たちのその途中の悩みや苦悩を共有することができるからです。そこから、人間のさまざまな部分を学び、想像する力を養うことができます。ですから、決して投げ出さないで、時間をかけても読み続けることは、それだけで十分に意味があることなのです。

そして、自分にとって最高の1冊を見つけたら、それを生涯にわたって何度も読み返してみることをおすすめします。名著といわれるものには、そのときわからなかったことが、今読むと理解できるなど、さまざまな発見があります。ちなみに、映画監督の黒澤明氏にとっての1冊は、トルストイの「戦争と平和」だったそうです。

●想像力で心の軸を養う

私が文章を書くという仕事を選んだ理由は、実は文章を書くことが得意ではなかったからです。得意ではない分、努力していけるだろうと思いました。私は、高校、大学と野球をやっていて、そのほかには、絵を描くことが得意でした。一時は絵描きを夢見たこともありました。しかし、自分が得意なことに関しては、もし、うまくいかなくなったときに、その原因を自分ではなく、世の中のせいにしてしまうのではないかと思いました。結果として、その選択は良かったのではないかと思っております。幼い頃、私は大変悪い成績をとったことがありました。そのとき、母親は、「これ以上、成績は下がることはない。あとは上がるだけだから大丈夫」といって励ましてくれました。これが、その後の直木賞につながっているのだとしたら、言葉の使い方というのは、本当に大切なものだと思います。

還暦というと、一昔前は大変な高齢でしたが、今はただの通過点にすぎません。私は、若い頃は十分遊んで、60歳になったら、仕事を倍にするつもりで働こうと決めていました。しかし、小説を書くという作業は、非常に体力が要求されることです。例えば、藤沢周平さんという方は、体が弱かったにもかかわらず、作家としてのすばらしい体力を持っていらした方だと思います。彼は若い頃から小説を書き続けながら、少しずつ、上達していったのです。このように、作家に休みはありません。ただ、書いていくのみです。

どのような仕事にも、心棒となる軸があり、そこに宿る情熱のようなものが必要です。仕事は、うまくいかないときのほうが多いに決まっているのですから、そのときに耐えられる軸を心の中に育てていくことが大切です。そのよりどころとなるのが、読書から得られる、豊かな想像力と創造力、そして、希望ある言葉の使い方だと思います。

伊集院 静 氏　プロフィール
1950 年山口県防府市生まれ。1972 年立教大学文学部日本文学科卒業。1981 年「小説現代」誌上に「皐月」を発表し、文壇にデビュー。また、伊達歩(だて あゆみ) の名で作詞家としても活躍。1987 年「愚か者」の作詞により、第 29 回日本レコード大賞受賞。1991 年「乳房」で第 12 回吉川英治文学新人賞受賞。1992 年「受け月」で第 107 回直木賞受賞。1994 年「機関車先生」で第 7 回柴田錬三郎賞受賞。2002 年「ごろごろ」で第 36 回吉川英治文学賞受賞。映画化、テレビ化された作品は多数。著書は受賞作ほか、「あの子のカーネーション」「美の旅人　フランスへ」「羊の目」「少年譜」「作家の愛したホテル」「夢のゴルフコースへ　スコットランド編」「スコアブック①②③④⑤」「お父やんとオジさん」「浅草のおんな」など多数。

出典　FUJITSUファミリ会　会報Family337号（2010年10月20日発行）